

9-9			
主題	地域住民との共催で得られる認知症カフェの効果		
法人名	社会福祉法人 はるび		
事業所名	特別養護老人ホーム はるびの郷、東村山市東部地域包括支援センター		
発表者（職種）	徳山滋久（介護係長）、小崎義和（介護支援専門員）		
共同研究(実践)者	秋津あんしんネット（東村山市秋津町高齢者あんしん見守りネットワーク）		
電話	042-397-5511	FAX	042-396-1112

今回発表の事業所やサービスの紹介	東村山市にある特別養護老人ホームです。（H7年設立、80床、ショートステイ8床）「春の日ざし」のような暖かい雰囲気の中で、ご利用者のニーズと意思を尊重し、その人らしく心豊かに安心して暮らしていただけるよう、真心こめた援助にあたっています。
------------------	---

《1. 研究(実践)前の状況と課題》

はるびの郷が協賛団体として関わっている『秋津あんしんネット（＝地域住民主体の高齢者見守りネットワーク、H25年設立、個人サポーター108名、団体サポーター16団体）』で、認知症講座をおこなってきた。次のステップとして、サポーターの活躍の場が必要となっていた。

市内の地域活動はサロンをはじめ盛んに開催されているが、認知症カフェの開催はなかった。

《2. 研究(実践)の目的ならびに仮説》

認知症カフェの開催は、高齢者が安心して暮らせるまちづくりに繋がっていく。

見守りネットワークとの共催により、認知症カフェの核となる4者（認知症高齢者、家族、地域、専門職）のコミュニティーが容易である。

見守りネットワークへサポーター登録された方の活躍の場となる。

《3. 具体的な取り組みの内容》

秋津あんしんネットの運営委員会に参加し、認知症カフェの必要性をプレゼンテーション後、住民主体の協議の中でカフェのプレオープンが決定した。その他、カフェのネーミングやロゴ、具体的な手法、講座などの付加価値も検討した。

開催に際し広報活動を含め、市の社会福祉協議会や包括支援センターにも協力を得た。

《4. 取り組みの結果》

プレオープンには30名が来店され、熱意あるアンケート結果から、毎月の定期開催となった。

家族介護者や3世代での来店など、地域の認知症カフェに対する需要や期待を大いに感じた。

《5. 考察、まとめ》

車椅子トイレなどの設備や専門職の滞在など、施設でおこなうメリットを多く感じた。

来店者の認知症予防や老後に不安のある方へ、サロン活動の紹介や一部実演など、地域住民とおこなうメリットも多く感じた。

《6. 倫理的配慮に関する事項》

カフェ来店者と秋津あんしんネット運営委員に文書と口頭にて確認をし、研究内容を本発表以外では使用しないこと、それにより不利益を被ることはないことを説明し同意を得た。

《7. 参考文献》

厚労省HP 「認知症施策推進総合戦略」概要

《8. 提案と発信》

かかりつけ医がMC Iを疑ったときに認知症カフェを勧めることや、地域住民との共催がオレンジリング（＝認知症サポーター養成講座修了者）を取得された地域住民の活躍の場を発展するなど、地域包括ケアシステムの土台づくりになっていくことが考えられる。